

INDEX

- p1 ピンクリボン活動2018
- p2 平成30年度日本医師会女性医師支援センター事業  
中国四国ブロック会議の報告
- p4 第9回岡山 MUSCAT フォーラム「私たちのレジリエンスー自分・組織・地域ー」
- p5 平成30年度女性医師支援担当者連絡会 報告
- p6 山陽ロードレース救護班に参加して
- p7 シリーズ女性医師支援 当院の女性医師支援の取り組み[倉敷市立市民病院]

## ピンクリボン活動2018

岡山赤十字病院／岡山県医師会女医部会副部長 渡邊 恭子

ピンクリボン運動とは、乳がんで亡くなったアメリカの患者家族が「このような悲劇が繰り返されないように」との願いを込めて作ったリボンからスタートした、乳がんの正しい知識を広め、乳がん検診の早期受診を推進することを目的として行われる世界規模の啓発キャンペーン、もしくはそのシンボルです。

日本でも、毎年10月には「ピンクリボン月間」として全国各地で様々な取組が行われており、ピンクリボン岡山でも、乳がんの啓発活動と、乳がん検診受診率の向上を目的とした様々な企画を計画し

ています。

ピンクリボン岡山の活動としては、例年通り10月に駅前ターミナルスクエアビルのピンクリボンのライトアップ、県庁や市役所の乳がん検診啓蒙の懸垂幕等があり、10月8日（月・祝）はチャリティーコンサート（岡山県医師会館）が催され、オリジナルピンバッジとオリジナルマフラータオルを作成しイベントの告知をしていました。

10月13日（土）は、午前中に3班に分かれてピンクリボン運動PRウォーク（パレード）として市内約3kmのウォークラリー、駅前でのティッシュ配布と



検診車による無料マンモグラフィー検診、各種出店によるブースの設営、午後からコンベンションセンター2Fで県民公開講座が行われました。

講演1「乳がん検診について」を倉敷成人病センターの平田美夏診療放射線技師が、講演2「乳がんと食事」を岡山県南部健康づくり財団の豊田加奈子管理栄養士がされ、その後全米ヨガアライアンスの萩原梓さんがヨガの体操を教えてくださいました。講演3は岡山済生会総合病院の元木崇之先生が「知りたい!若年性乳がん」のお話として、「BRCA1」と「BRCA2」の遺伝子異常があ



る場合に70歳までに70%の人が乳がんを発症し卵巣がんにもなりやすい「遺伝性乳がん卵巣がん症候群」についてご講演されました。ほぼ満席で、立ち見の方もおられ関心の高さを感じました。

日本人女性のうち乳がんを発症する割合は約11人に1人と多く、また乳がんで死亡する人は1万4千人を超えています（人口動態統計2017年）。働き盛りや子育て世代の40代から罹患率が高くなりますが、早期発見では予後が良いため、この活動を通して受診率や早期発見率の上昇につながれば幸いです。

## 平成30年度日本医師会女性医師支援センター事業 中国四国ブロック会議の報告

岡山市立市民病院／岡山県医師会女医部会部会長 坂口 紀子

日 時：平成30年11月11日（日）10:30～12:30

場 所：ホテルグランヴィア岡山 3階パール

参加者：日本医師会 4名、

中国四国各県医師会 37名

（岡山県医師会女医部会より金重、渡辺、坂口委員と岡山県医師会より神崎寛子専務理事）

会議は、毎年1回、中国四国9県のいずれかの医師会が担当となって、各県持ち回りで開催されていますが、ここ数年は交通の利便性から岡山開



催が続いています。この日はおかやまマラソンの日でしたが、鳥根県の担当で滞りなく会議が開始さ

れました。

まず、日本医師会女性医師支援センター事業について、日本医師会・平川俊夫常任理事から説明がありました。中でも女性医師バンクについては、昨年度から非医師の専任コーディネーターを配置したことから、サポート体制がより細やかとなり、求職者数、就業成立件数とも、平成29年度は平成28年度に比べると2倍弱の増加となっていました。都道府県医師会との連携もさらに強化され、都道府県医師会のホームページとリンクされています。また、女性医師が生涯にわたり、能力を発揮するためには、医学生、研修医の時期から、ワークライフバランスについての理解、多様な医師像モデルの提示が必要という観点から、「医学生・研修医をサポートする会」を引き続き各地で開催しています。

次に、各県の取り組みが紹介されました。女性医師の交流会、学会時の託児支援は多くの県で行われています。院内保育所、病児保育も施設数が増えています。

女性医師支援事業の初期の話題は、勤務環境の整備、復職支援、保育支援の話題が多かったのですが、それらに加え、医学生や研修医に向け

での働きかけが増えています。そして、就業継続や復職だけでなく、キャリアパスの形成、職場管理職への就任などを目指すことについても、事業対象となってきています。岡山県医師会でも、2019年に病院、研究機関での女性医師の人財に対し、顕彰を行う予定です。

ブロック会議は、全国会議に比べると顔見知りの方が多いため、会議後の時間を利用しての情報交換が行いやすく、近隣の県なので、地域性があるとしても、まだ差異が少なく、参考になる事業を取り入れるのも、実効性が高い気がします。

この日も岡山の保育支援について、他県の方から、実際の運用についての質問がありました。この会議への参加後は、毎回、他県の事情、日本医師会事業の内容を確認しながら、引き続いて女性医師支援のレベルアップを図るきっかけにしなければと気持ちが引き締まります。



# 第9回岡山MUSCATフォーラム

## 「私たちのレジリエンス—自分・組織・地域—」

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 地域医療人材育成講座 渡邊 真由

第9回岡山MUSCATフォーラム「私たちのレジリエンス—自分・組織・地域—」が2018年11月17日に開催されました。



特別講演1では、安田あゆ子先生（藤田医科大学病院 医療の質・安全対策部 医療の質管理室長）をお迎えし、「変化する医療システムと私」と題してご講演をいただきました。先生はリサーチフェロー・外科医・厚労省医系技官など輝かしい経歴を経て、現在の役職に就き、大学病院という組織の中で自身の役割を遂行されています。また並行して、当時はほぼなかった出産育児を行う医師を支援するパンフレットを作成するなど、支援体制の礎を築かれています。マズローの欲求5段階説を交えて、介護・育児と仕事との両立におけるご自身の想いもお話いただき、自分自身の理解も深まったように感じます。医師として今後、

先生からいただいた「ピンチはチャンス」という言葉に胸に、前向きにチャレンジしていけたらと、非常に元気をもらえるご講演でした。



特別講演2は、高木都先生（奈良県立医科大学 名誉教授）をお迎えし「私の（場合の）レジリエンス」についてご講演いただきました。当院の「なかよし園」の設立にご尽力なされた話など、内容は多岐に亘り、講演中に涙を抑えきれず、非常に胸を打たれるお話でしたが、先生のプライバシーとなるため詳細は記載できず残念です。私のような若輩者が表現することができないほどの想いのご経験をされていていながら、教授を退官される際のお気持ちとして「みんなにありがとう」とおっしゃっており、先生のレジリエンスを学ばせていただきました。

先輩の先生方のご尽力の元に、私たち後輩が



両立を目指した勤務が可能な環境があることを再認識でき、前向きな気持ちとなれる清々しいご講演をいただけたと存じます。

グループディスカッション「私たちのレジリエンス—自分・組織・地域—」は、当方の不手際にて十分な時間をとることができませんでした。ご講演をいただいた先生方にもご参加いただきました。具体的に困難な状況下に対処するかを、様々な立場からディスカッションをいただき、回答を得られるグループもありました。

この度のMUSCATフォーラムが成功の内に終わられたのも、ひとえにご講演いただいた先生方や、

ご参加いただいた皆様のおかげと感謝しております。この場を借りて深く御礼申し上げます。今後とも何卒よろしくお願ひ申し上げます。



## ◆◆◆ 平成30年度女性医師支援担当者連絡会 報告

社会医療法人清風会 岡山家庭医療センター／岡山県医師会女医部会副部長 村田 亜紀子

開催日：平成30年12月9日（日）

会 場：日本医師会館 大講堂

平成26年度より始まった本連絡会は開催時間を5時間まで拡大し、日曜日に今年度は開催されました。医学会・大学医学部（各2か所）と都道府県医師会取り組み事例紹介が行われました。

<日本肝臓学会>

演者：男女共同参画委員会委員長 飯島尋子先生

比較的女性会員の少ない同学会で、女性評議員増加・女性理事誕生へ向けてこれまでなされてきた暫定指導医の認定や女性座長の増加の働きかけ等とその成果、今後のキャリア支援について

の紹介がありました。

<日本皮膚科学会>

演者：キャリア支援委員会委員長 青山裕美先生

30歳以下の女性割合が70%以上と女性の多い同学会では指導者層に女性が少なく、大学病院や入院機能を持つ病院における皮膚科の役割が果たせなくなるのではという切実な問題意識があるそうです。メンター&メンティ相談会等の女性医師および若手医師のサポートを継続して行うことで指導医として自覚を持って活躍する医師を増加してきた旨の紹介がありました。

<広島大学病院>

演者：女性医師支援センター 石田万里先生

広島県医師会・地域医療支援センター・広島

県全体と協働して行っている、女性医師の相談窓口の設置、広島県女性医師支援総合会議でのマッチングによる女性医師の復職・



飯島尋子先生



青山裕美先生



石田万里先生



高田礼子先生

キャリア継続支援と常勤医の負担軽減、定員外増員分の『女性医師医科診療医』枠の構築、複数主治医制の導入、保育環境整備の紹介がありました。

＜聖マリアンナ医科大学＞

演者：男女共同参画キャリア支援センター

高田礼子先生

全学的な意識改革と価値観の共有、研究力向上のための支援やライフイベントへの支援を通じた女性研究者比率と女性幹部比率向上、さらには



ダイバシティの拡充を目指した取り組みについて紹介がありました。

＜都道府県医師会＞

各地での様々な取り組みの紹介がなされ、特に九州ブロックで盛んな病児保育を拡充する活動について議論になりました。

結語

フロアからは病児は親が看るべきで休みを取らずに働くのは時代に逆行している、海外では存在しないのではと反対意見が出ており、一口に女性医師支援の取り組みといっても多様な価値観があり仕組み作りには工夫が必要と考えさせられました。

全体として、長時間労働が前提で100か0を求められると諦めざるを得ない人が増えるのでその間が選べるように支援すべき、キャリア支援と育児支援は分けて考えるべきということが実感でき、意義深かったです。貴重な機会をいただきありがとうございました。

## 山陽ロードレース救護班に参加して

さいとう耳鼻科／岡山県医師会女医部会委員 齋藤 稚里

平成30年12月23日、平成最後の山陽ロードレース救護班に参加しました。前日までの、寒くて雨模様かもという予報と裏腹に、寒くもなく雨もなく、穏やかな一日が始まりました。

今回が初めての参加であり、坂口先生に教えてもらえばいいし、駅伝マラソンのファンとしては、いつも路上で応援しているのが、近くで見えてラッキーぐらいの軽いのりで参加しました。シティライトスタジアムに集合して、医師会女医部会と書かれたテントへ。深田先生の指導の下、のぼりをたて、机に当日配布するティッシュ入りの女性のがん検診啓発チラシを用意して、号砲を待ちます。



つ行い、その合間にも、先ほど用意したチラシを配って歩きました。

スタジアム内の医務室にも女医部会から参加のドクターが一人詰めておりました。一流の女子ランナーばかりのため、医務室を利用されたのは、レース終了後に捻挫が一人、足の痺れが一人のみであり、医務室は穏やかでしたが一人脱水で搬送された方がおられました。239人の選手が疾走する様子は、スタジアム内の大画面テレビで観戦応援しつつ、やはり岡山の選手がトップを走ると、がんばれと思わず声を上げていました。岡山勢の成績もよく、東京オリンピックが楽しみなレース展開でした。

いつも沿道で応援するだけの私は、プログラムを見ながら、多くの人の手によって大会が運営されていることに改めて気がつきました。最後の表彰式では、入賞した市民ランナーの人たちに賞品



を渡すお手伝いことができました。何事もやってみないとわからない、次にするときは少しは動けるようになるかな、と思いつつ、半日の仕事を終えました。

スポーツを通してカンボジアとの交流があることも隣のテントの方と話すことで知りました。実際に目で見たり参加することで得られるよい経験をこれからも積み重ねていきたいと思いました。

シリーズ  
女性医師支援  
病院での  
取り組み

第21回

## 当院の女性医師支援の取り組み

倉敷市立市民病院 院長 江田 良輔 先生



倉敷市の市長は伊東香織さんで桁違いに有能な女性です。市役所職員や市議会議員も太刀打ち困難な圧倒的なオーラを放っています。ここ倉敷市児島地区では歴史的な要因もあり、商工会議所女性部会や国際ソープチミスト児島などの活躍が顕著で女性が先頭に立って働き、社会貢献している風土が根付いています。私が岡山大学医学部を卒業したのは昭和59年で、当時同学年には10名の女性が在籍していました（最近30名ぐらいでしょうか）が、みなさん優秀かつ勤勉で、私のような落ちこぼれそうな学生には〇〇さんノートが大いに役立ちました。彼女たちが医師として社会に出て存分に活躍しているだろうことは容易に想像がつきますし、当院にも最近、神の恵みか、

その1人の竹久紫乃先生が救世主のごとく赴任してくれました。この原稿の主旨は病院（院長）が女性医師支援として何をしているかを問うものですが、地域の弱小中小病院では24時間365日絶えず「質」も「量」も確保しながら医療を提供するのは大変なことで、さらに昨今「働き方改革」に対する施策もすべきとなると、実効的な取り組みには無縁のような気がしています。当院では女性医師も無理強いをお願いする戦士の位置づけで経営面にも参画してくれています。適材適所でいい味を出しており、医局会での話し合いの際にもやはり女性がいると和むし、男性では思いつかない発想や知恵を得ることも多いです。ということで「当院の女性医師支援について」

ては大病院とは一線を画して考えなければならない」と言い訳しながら、現在常勤でがんばっている女医姉妹たちにその思いや信念などを本音トークしてもらい、前述の竹久先生に長女役として統括をお願いいたしました。

\* \* \* \* \*

長女こと麻酔科の竹久です。まずは「妹」たちに、女医として、あるいは当院の環境について、自由に語ってもらいます。女子受験生への入試差別などが報道される中、それぞれが仕事への意欲や覚悟を新たにしているのではないのでしょうか。

### 【次女】小児科 木村祥子

#### —女性医師として考えたこと、感じたこと—

私は、中学・高校のときに感じた「なぜ自分は友達ができにくいのだろう。」という問いを抱えて心理学を学ぼうと思っていましたが、担任教師の「それなら医者になれば、もっとよく学べるよ」という言葉にだまされて受験し、医者になってしまいました。しかし研修医のときに体調を崩し、二年ほど休職し以後しっかり人並みに働けず、常勤になったところで稼ぎが悪いとクビになり、細々とアルバイト生活をしていました。平成26年9月に「児島市民病院に欠員が出た、休日の当番はあるけど弾力的な働き方ができるよ」と勧められ、不安もありましたが、再び常勤で働いてみようと思いました。同年12月に病気になりましたが、治療を受け『あと10年は働ける』といわれました。平成27年4月から働きはじめ、翌年4月からは小児科が3人体制になって仕事が増え、夜の当番の回数が増えました。自分の当番日は朝遅く出ることを許可していただき助かっています。また、新病院には女子専用の仮眠室を設置していただき、体調不良や睡眠不足の際に利用でき、ありがたいです。私の体力では現在の勤務体制が精一杯です。私は独身のため子育てはしておりませんが、家事や銀行などの手続き等、平日にしなければならない

ことが遅出のときにできるのがうれしいです。勉強して行く中で、高校生のように感じていた問いの答え—自分は「発達障害」という範疇に入るのだということ—に気づきました。そして小児科一般外来の中で同様の児をたくさん見るようになりました。そのような「かつての私のような子ども」を援助することで、過去の私とこれからの子どもたちが少しでも生きやすくなるよう努力していきたいと考えております。

### 【三女】形成外科 篠山美香

#### —女性医師支援 私の感想—

倉敷市立市民病院に赴任して、2年が経とうとしている。赴任した当時は、古い建物で、女性医師4人で1つの部屋を使用していた。それはそれで、楽しかった。新病院では、一つの部屋を幹部以外の先生と一緒に使用する大所帯となった。横のつながりがパワーアップし、さらに便利となった。男性も女性も対等であり、私のようなものでも頼りにしてくださるのでありがたい。20数年前、研修医のときに上司である男性医師から「研修医は結構きつくあたられ、悪く言われ、まして女医さんだったら軽蔑されることも多々あると思う。怒りが込み上げてくるかもしれない。けどな、今はぐっと我慢しろ。年数がたつと逆に頼りにされるようになるから…」と言われたのを思い出す。私自





身は意識していなかったが、上司から見ると私の態度に何かがあったのだろうか。今は上司の言葉に先輩女性医師たちが経験したであろう、偏見やつらさを思う。今年の4月に数名のベテラン女性医師と待遇に関して話す機会があった。ここでもご自身が卒業した大学病院の医局において、女医というだけで男性医師から「できればうちには入ってほしくないな。すぐやめなよ?」と言われての方がいらっしまった。何人かの女性医師が入局してほどなくやめていったのだろう。育児・介護などやむを得ない事情の離職とはいえ、その女性医師の仕事を代わりに行う、残された医師の負担も小さくはない。別の女性医師は「このまま自分があると、他の医師に迷惑をかけ、自分の家庭にも影響が出ると判断して退職した」と語っておられた。本音は若いうちにしっかりと知識・技術を磨きたかったようだった。現在の職場はしっかり働けて、適度なプレッシャーや楽しさがある。そして、私のお気に入りには「マスカットレストルーム」という女性医師のための休憩室である。体調を崩した時や当直明けの昼休みに30分くらい横になると少し疲れが取れ、午後また頑張れる。夜中に呼び出された、災害で交通機関が停止した際に翌日の勤務に備えるなど、当直以外で病院に泊まり込む時にも利用でき助かっている。今後も女性医師として、自分のできることをしっかり行い一億総活躍の一端を担えるようにしたいと思う。

#### 【四女】形成外科 小山晃子

「前例がありません。」 当時勤務していた大学病院で産休を申請した際、事務局の方はおっしゃいました。長男は11才になり、今となっては「懐かしい」部類の思い出です。上司や先輩の有形無形の援助があり、無事3ヶ月の育児休暇をいただきました。お腹が大きくて、靴下がはきにくい私のために、手術更衣室に椅子を一つ置いてくださったこと。復帰後、手術の合間に搾乳をするために、シャワー室を使えるよう便宜を図ってくださっ

たこと。思い返せば、職場の方々の理解と協力のお陰で今があると実感します。その後大学病院内でお腹の大きい女性医師が勤務していることは珍しいことではなくなったようです。当院に勤務するようになった時には「あったら助かるでしょう」と院長肝いりで院内保育所が作られているところでした。そのおかげで、三男は生後56日から私と病院に同伴出勤でき、私も昼休みには授乳ができ、育児時間を取得してゆっくり出勤、早目の退勤。通勤時間の往復80分は歌を歌ったり、話しかけたりして過ごすことができ、貴重な育児時間を持つことができました。子供を持つことに、特別な決意や覚悟を持って臨んだ訳ではありません。世の中の普通のお母さんたちと同じように、不安と期待を持ちながら、おそろおそろ踏み出しただけです。更衣室においてくれた一つの椅子のように、小さな温かな支えに勇気づけられて3男子の母になりました。有るか無いか明確でない「子供を産み育てることのプレッシャー」に戦くよりは、身の周りの支えに気付いて、女医であれ、自分らしく医者人生を全うできたとしたら。医師という、他人の痛みや苦しみに寄り添い、かつ何らかの支えをすることができ、その支えを強めるために自分も思う存分研究・研鑽を積むことができ、そのことが社会的に評価される稀有な仕事を持っていること。子供をそだてるという人生を歩むこと。先人の開拓してくれた道、職場、同僚、家族、患者さん、多くの方の理解と協力に改めて感謝を抱きつつ、よりよい医療に近づけるよう日々生きている所です。



## 【五女】呼吸器内科 後藤田裕子

当院に赴任して5年が経とうとしています。それまでは岡山市内の基幹病院で診療に没頭し、情熱を注いだ日々でした。結婚して3年、妻・女性としての在り方を考えるようになっていた時期でもあり、倉敷市立市民病院への赴任は医師として、そして女性としてのワークライフバランスを見直すよい転機となりました。現在私は、女性医師支援の中でも育児支援という点で支えられながら充実した生活を送っています。仕事があるから家庭が、家庭があるから仕事が潤うんだと感じています。当院に赴任後、それまでの経験をもとにして呼吸器専門医取得、総合内科専門医取得を果たしました。当院の患者さんには呼吸器疾患も多く、資格があるということは、やはりやりがいに繋がります。そして二人のかわいい息子の妊娠、出産を経験し、育児にも奮闘しています。出産・育児休暇、当直・時間外勤務の免除、院内保育所といった福利厚生にも恵まれています。それでも両立は非常に難しく、綱渡りのような日々です。仕事も家庭もそれぞれに100%の時間を注ぐことは不可能で、ジレンマを感じ気が滅入ることも多いのですが、周囲への幾分かの甘えと、自分への幾分かのプライドでギリギリ保っているといったところです。職場においては他の医師による穴埋めがどうしても必要なのですが、温かい理解、まなざしこそが最も大きな支援となっています。育児支援に恵まれた病院は多くないのが現状で、私の周囲にも出産を機に両立を果たせなくなって離職したり、専門医取得を断念した女医さんがたくさんおり、ロールモデ

ルが数少ないのが残念なところです。職場の影響で、結婚・妊娠・出産・育児の適齢期を逃してしまわないような、引け目を感じなくてよいような環境が広がって整い、多様なワークライフバランスが認められるようになればと思います。一時のブランクがあろうと女性医師には、女性ならではの感性や細やかさ、ひたむきさなど、医療に必要なとされ生かされる素質も多く、復帰を待ってくれる場があれば挽回可能なのではないかと思います。私自身、医師としての資格維持・向上に努め、また妻・母として我が家庭を大切にすることで自分を磨き、患者さんの身体や生活に真から寄り添う医療が提供できるよう、努力を続けていきたいと思っています。

## 【末っ子】内科 木村真弓

結婚、出産で変わることは、自分の身が自分だけのものではなくなるということです。独身時代は、まず仕事が第一、全力で取り組むことが頭の中の大半を占めていましたが、今は妻や母として最低限の役割を果たしたうえで、医師としてできることを、という気持ちでいます。それをなるべく長く続ける、ということがミソだと思っており、今後仕事をする上での一番の課題かもしれません。とはいっても、妻や母になって日が浅い私にとっては、大半が想像の域を出ない話でもあります。倉敷市民病院でも勤務にあたっては、妊娠希望をお伝えし、当初より時間外勤務や当直業務を免除いただきました。私はもともと、人に頼るのが下手なタイプで、代わりに務めてくださる先生方への気兼ねや遠慮の気持ちが強くありました。一方、周りの先生方は、私の体調をいつも気かけ、そしてなにより妊娠・出産を共に喜んでくださいました。それを直に感じられたからこそ、後ろめたさを感謝の気持ちに代えて、自分にできることはしっかりやらねばと奮起できました。女性医師が、子育てをしながら働くうえで、時短勤務や業務軽減という制度は必要なのですが、女性医師自身が周りへの感謝や配





慮を忘れないことや、周囲の理解や雰囲気、つまり働き方云々以前に人間関係が大切なのだと思います。また、子供の成長に応じて、その時々でできる働き方は変わっていくので、その都度可能な勤務を相談できる体制があればなお有難いことです。そのためにも、理解ある上司の存在がとても心強いと思います。

### 【長女】麻酔科 竹久紫乃

「おまえは顔も性格もいまひとつだから手に職をつけなさい。」と母に言われ、深い考えもなく医学部を受験しました。在学中に両親が離婚するやら、先輩女医さんが「仕事も家庭も中途半端で…」と泣くのを目撃するやらで、一生独身でいようと思ったはずが、年下の研修医とでき婚、流産、切迫流産で自主退職、出産、離婚。先のことを考えないからこうなったのか、先のことを考えないから生きていられたのか、よくわかりません。医局と勤務先のご厚意で母と息子を養うことができました。常勤に復帰した岡山医療センターで、心臓麻酔や新生児の麻酔を経験させていただき、どうか「普通の麻酔科医」になれたと思います。医師・麻酔科医としての目標や理想すらなかった私の前に、初めて「目標」として現れてくださった「オヤブン」こと谷口正廣先生はじめ皆様には深く感

謝しております。母は亡くなり、いろいろ我慢させた息子は社会人5年目となり、私は59才になりました。引退を考える時もありますが、同級生の江田院長、産婦人科の高取先生、多賀先生が目の前でがんばっているの、知らん顔もできません。学生実習の時「献体を解剖させていただいた分だけは世の中に返さないといけない」と思ったのに、まだお返しできてないような気もします。地域医療の最前線、潮風と時代の波に立ち向かう当院で、もう少しの間、土曜日の日中以外は麻酔待機いたします。

さて、当院の医局について少しご紹介します。実は、新病院の医局には、気持ちよく働ける「仕掛け」もあるのです。

### 【医局の雰囲気】

常勤医師27名、誰がどんな仕事をしているかすぐわかり、科を超えて仲良くしやすい規模です。男性が女性の仕事ぶりを評価してくださっているのか、実際女性がいい仕事をしているのか、男性対女性という差別が感じられません。倉敷市の中心から少し遠いため「このメンバーで助け合わなければ」という意識があるのか、大規模病院で時に見られる、診療科どうしの不平等感やギスギスした感じもありません。院長は診療に当直に率先して働き、夕方一回は医局に現れ、気軽に相談や報告ができます。

### 【設計段階での院長の深謀遠慮】

外来と病棟との中間地点、どの診療科の医師も行き来しやすい場所に医局があるので、「あの先生は医局に来ないので親しくなれない」ということはありません。各医師のデスクと、共有スペースとの位置関係が絶妙で、他科の興味深い症例検討の声が聞こえたら、茶飲み話感覚で参加できます。しかも、自分の勉強に集中できないほどうるさくもないです。廊下を隔てて、好評の女性用仮眠室があります。リクライニングチェアの寝心地もすばらしいけれど、医局に近いというのが最

高です。設計段階から院長がこだわった医局の位置・設計は、計算通り働きやすさ、雰囲気づくりに役立っています。専門医研修中や産後復帰の女性医師が来てくださったときも、大きな負担なく、他の医師と打ち解け、勉強や診療に集中していただけるのではないのでしょうか。私たちも、新鮮な知識と視点を持った若い先生の来訪をお待ちしています。

## 結び 【家長】江田良輔

岡山県医師会女医部会委員として児島からは、子育てしながら在宅医療も精力的にこなす患者さんから大人気の西原内科眼科医院の草場珠郁子先生（夫さんは当院の耳鼻科医長）がご就任されており、児島医師会女医部会（21人の女性医師で構成）では、児島医師会元会長の松香陽子先生が音頭をとられ、女性医師支援懇談会と称しておいしいものを食べながら慰労、団結する会を定期的に催しておられます。当院の姉妹たちも喜んで参加し、松香先生いわく当院の女医達は特

にパワフルで元気がいいとご評価をいただいております。また、当院の診療を支えてくださっている外勤の女性医師の先生方は大学医局から概ね週1回来院診療と入院患者相談などでその才能をいかんなく発揮されており、循環器内科の森田志保先生、小児神経内科の遠藤文香先生、神経内科の森本みずき先生、整形外科の鉄永倫子先生、眼科の細川海音先生、産婦人科の岩永優子先生、内科の山岸智子先生、板野純子先生には感謝しております。というわけで当院は、女性医師の活躍がなければ病院そのものが破綻する現状にあります。今後とも温かいご指導、ご支援のほどお願い申し上げます。



## 編集 後記

最初に今回の会報発行にあたり、関わった方々へ心より感謝を申し上げます。

私が総社市で開業して今年4月で16年目になります。皮膚科形成外科と標榜していたためか、開業1年目で、乳がんの患者さんを二人経験しました。5～60代の女性です。一人は左の胸に竹籠をかぶせた状態で来院されました。診察室に入ってこられた時点で臭いがあり、鎖骨、腋窩のリンパ節は小石のように皮膚まで壊死が進行している状況でした。もう一人は、やはり左胸で皮膚のひきつれ、発赤、熱感をとまなういわゆる炎症性乳がんでした。診察後、お二人とも即専門医へ紹介しました。胸をみせることが恥ずかしかったと言われ、悪いものだったらどうしよう、でも違うと言ってくれるかも、祈るような思いで受診されたのだと思います。

「ピンクリボン岡山」が活動をはじめ4年目、今や乳がんをはじめ早期診断治療することでほとんどのがんの予後は格段にあがっています。だからこそ、ピンクリボン活動は、今後も広い世代に受診しやすい環境をつくることにつとめていく必要があると思います。（余談ですが、男性の前立腺がんの罹患率大もあり、前立腺バージョンもあるといいなと思っています。）

さて平成31年は4月30日まで、5月1日からは新年号です。昨年は吉備医師会には豪雨災害のため、閉院を決められた先生、なんとか再開された先生、再開のめどが立った先生方もまだまだ元どおりとはいかない状況です。地域医療のためにも、一日も早く以前のようになり、と願わずにいられません。来る新年号の一年、どうか穏やかでありますようにと祈ります。

岡山県医師会女医部会委員 漆原嘉奈子